

発話から〈心のうち〉をとらえるために

—「【言葉】についてのアンケート」結果と考察—

青 木 文 美

要旨：実習を終えた学生から、主活動の導入時や終了時の声のかけ方を考えておらず活動全体の緊張感が途絶えてしまった、という失敗を聞くことがあった。言葉を使わないで保育活動を組み立てることは不可能である。しかしながら、子どもへの説明や発話の意図を尋ねるなど、言葉で子どもと関わることは、思いの外難しい行為である。そこで、学生が実習中に交わした子どもとの会話を通して学んだことや、子どもに言葉でアプローチするための課題について確認するためにアンケートを実施した。本稿は、その内容と結果をもとに今後の課題について考察したものである。

Key Words：言葉，心，エピソード記述

Speech, Mind, Description of Child's utterance

1. はじめに

学生が記入した実習ノートを読んでいると、子どもの気持ちや自発的な行動を引き出す会話ができなかった様子がしばしば書き込まれている。また、実習園から返却された実習評価票においても、声かけや適切な指示の出し方などについて指摘されることが多い。保育の現場では、子どもに伝わる言葉選びや言い方が求められるが、学生たちは、実習中の子どもへの声かけについてどのように感じているのだろうか。

実際に、学生に意見を求めたところ、「子どもたちにうまく言葉を伝えられないことがよくあり（略）そのようなときに、もどかしい気持ちを強く抱きます」、「実習中、言葉がけ、声かけは一見何気なく発せられているように思えたけれど、いざ自分が発しようとする時、どうやって声をかけたらいいか、どうしたらこちらの意図が伝わりやすいか非常に迷い、とても難しい問題だった」、「実習では、言葉掛けが一番難しいと感じた」、「子どもたちへの言葉がけは難しく、同じことを伝えようとしても言い方1つで伝わり方が異なってくる」など、子どもに伝わる言葉選びや声かけについて悩んだ経験を語る学生が多く見られた。その一方で、「子どもへの声かけについて深く考えたことはなかった」、「子どもの声かけについて自分で考えたことはあまりなかった」など、声かけや言葉選びについて意識していない学生がいることも明らかになった。

言葉は、保育活動を行うために必要不可欠である。しかしながら、言葉でのコミュニケーションに慣れている学生にとっては、実習以前に言葉で意図を伝えることや聞き出すことの困難を意識する機会が乏しいため、言葉で子どもたちにアプローチするという認識が甘いことも事実である。そこで、言葉で子どもたちと関わることについてどのように考えているのか確認するために、アンケートを実施することとした。

2. アンケートの概要

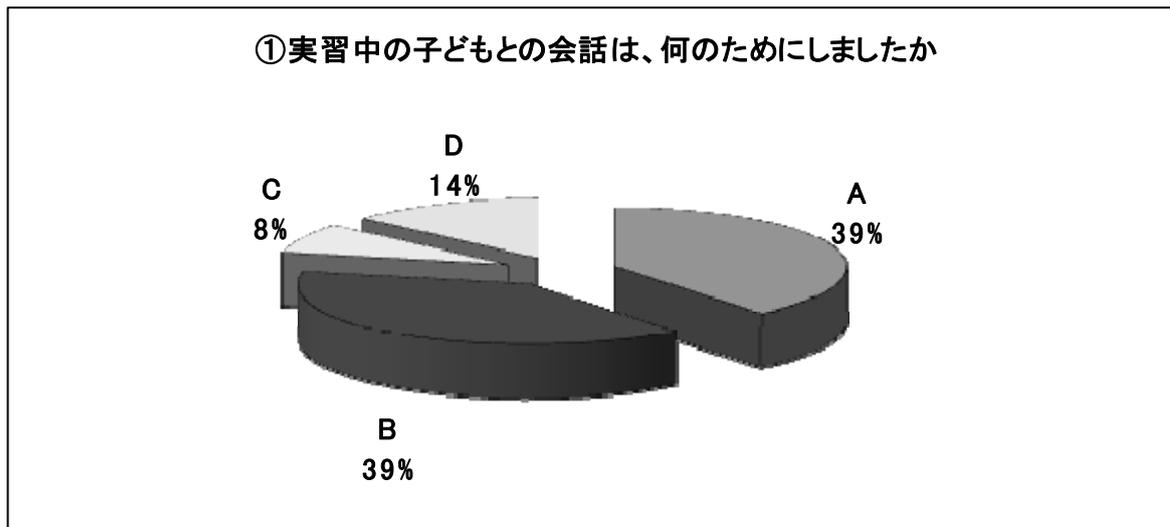
アンケートは、筆者の担当する「子どもと言葉」を履修する本学本学部福祉貢献学科子ども

福祉専攻3年生40名と4年生4名の計44名に、「【言葉】についてのアンケート」という題目で実施した。「1.はじめに」で紹介したように、言葉遣いや声かけの難しさをあげる学生が複数いたことを考慮し、調査内容を【言葉遣い】と【会話する意味】との2つに絞った。設問形式としては、あらかじめ用意された設問に答える方式と自由記述方式とを用意した。ここでは、学生が実習時に子どもとのコミュニケーションをどのように捉えているのか、その考え方が分かるものとして、「実習中の子どもとの会話は、何のためにしましたか」、「実習中の子どもとの会話と日ごろの会話とでは、会話から得られるものに違いはありましたか」、「実習中の指導担当の先生の言葉遣いや言い方で印象に残ったことはありましたか」の3点に絞ってまとめる。

3. 学生の回答

「実習中の子どもとの会話は、何のためにしましたか」という設問については、回答が4つの傾向に分かれていた(図1)。1つ目は、「子どもを知るため」など個々の子どもの性格や特徴を知りたいという観点からの回答だった。2つ目は、「コミュニケーション」を取ることで「お互いの心を通わせ」、「信頼関係を築く」ことを目的としていた。3つ目は、「子どもの安全を守るため」、「必要事項の確認」など実際の保育を運営するために行っていた。4つ目は、「自分のことを知ってもらうため」など学生自身について興味を持ってもらうことを目的としていた。

図1

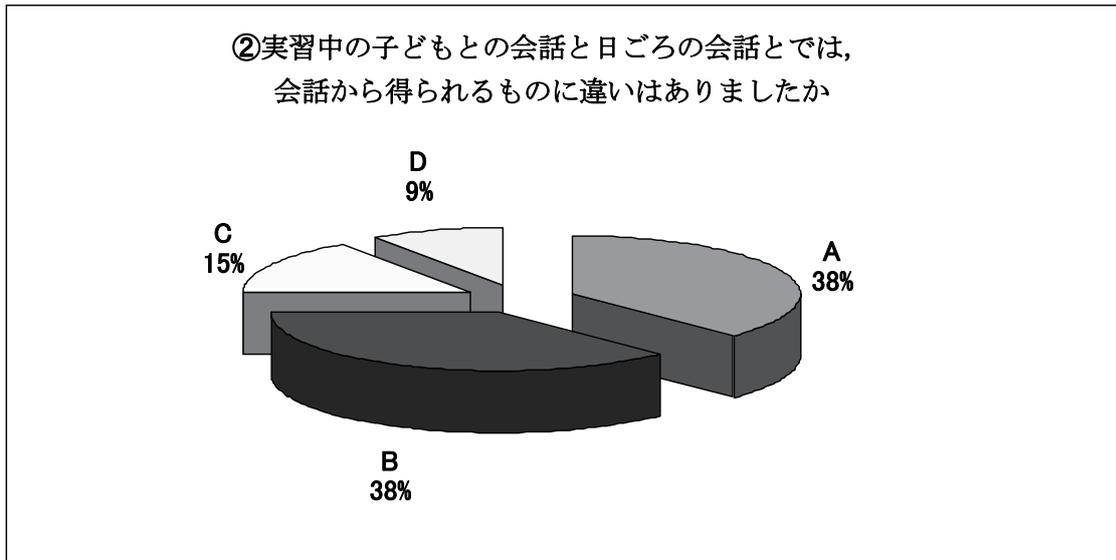


- A : 子どもを知るため
- B : コミュニケーション
- C : 子どもの安全を守るため
- D : 自分のことを知ってもらうため

「実習中の子どもとの会話と日ごろの会話とでは、会話から得られるものに違いはありましたか」という設問に対しては、38名が日ごろの生活における会話との違いを感じており、そのうち32名が具体的な違いを回答した(図2)。具体的な違いとしては、「発言の真意を汲み取ろうとする意欲」すなわち、子どもが「どういう気持ちでこの言葉を発したのかを意識」して聞き取ろうとしたり、「言葉遣いや話し方など相手に配慮」し、「相手が理解しやすいように」、「具体的にひとつずつ丁寧に」話そうとしたりするなど、言葉の真意を聞くことや伝え合うことに注目した回答が24名(76%)と半数を超えていた。特に、印象的な回答としては、「普段の会

話では言葉の表面だけをなぞりしているが、実習中は子どもが発する言葉の意味を考えて会話した、「意思の疎通というよりも、子どもの気持ちをくみ取るというところ」などがあった。また、「〈聞いてっ！聞いてっ！〉と自分のことを話」し、「自分の気持ちをストレートに伝える子どもの話し方や、子ども「世代の流行」など話題の違い、「子どもの視点」や「感性」の違いをあげた回答があった。ほかには、「肯定」的な言葉選びなど、話し方の違いをあげる回答があった。

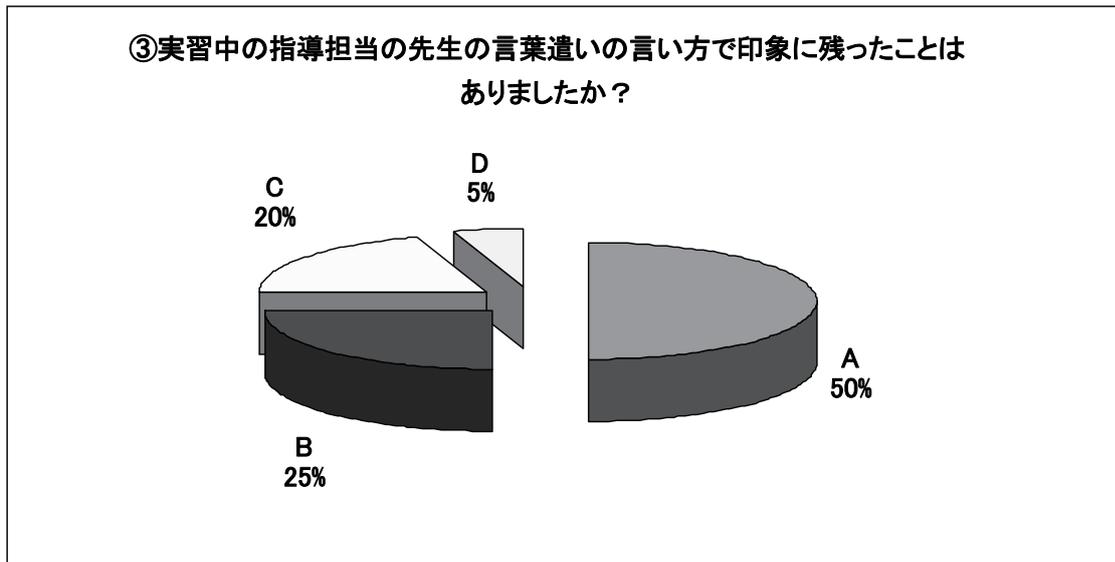
図2



- A：発言の真意を汲み取ろうとする意欲
- B：言葉遣いや話し方など相手に配慮すること
- C：話題など話す内容の違い
- D：その他

「実習中の指導担当の先生の言葉遣いや言い方で印象に残ったことはありましたか」という設問に対しては、44名中40名が具体的な内容を回答した(図3)。内容としては、多岐にわたっていたが、大きく分類すると「言葉選びや言い回し」、「話の広げ方や説明の仕方」、「声のトーンや抑揚」、それ以外の「その他」に分けられた。なかでも、「言葉選びや言い回し」として「子どもが理解しやすい言葉」で、「繰り返し」説明する姿や、子どもを否定せず「肯定的」な言葉がけを行う姿、さらには、「話の広げ方や説明の仕方」として「子ども自身が考えられるような」説明や問いかけをしていた様子をあげる学生が多かった(75%)。特に、印象的な回答としては、「先生が子どもに示すのではなく、子どもからの発言から会話や活動を広げていた」、「大人の視点で子どもに声かけをするのではなく子どもがどうすればそうしたいと思えるか考え、声かけして工夫していた点」などがあった。また、言葉がけの改善につながる具体例として、「いけないことは教えるけど、一方的に『だめ』という言葉をつかわない」や「『～しないで』ではなく、『～しようね』」、「パッパッパ(服に付いたものをはらうしぐさ)」、「あつまれ～(残ったごはんをかきあつめること)」などがあった。

図3



- A : 言葉選びや言い回し
- B : 話の広げ方や説明の仕方
- C : 声のトーンや抑揚
- D : その他

4. 結果と考察

アンケート結果からは、次に掲げる3点が明らかになった。

1つ目は、実際の実習においては、子どもとの会話の目的が「コミュニケーション」を図ることにと留まっている、ということである。実習中は、子どもとの会話を通して子どもの性格や特徴を知り、実習生である自分との距離が縮むように配慮することで精一杯であることが明らかになった。そのため、「自分を知ってもらう」など信頼関係を結ぶことに留まっており、個々の子どもの発見や感動を発話からすくい上げる、という視点を持つに至っていないことが明らかになった。

2つ目は学生が日頃の生活における会話と実習中の子どもとの会話を区別しているということである。学生が他者と関わる場合に使う手段は、日ごろの生活においても実習においても言葉による「会話」である。しかしながら、日ごろの生活と実習とは「会話」という語で説明している内容は異なっている。実習中は、子どもの言葉の真意を汲み取る〈場〉として会話場面を認識しており、子どもの言外にある表情や声色など、あらゆる角度から発言の内容を理解する必要があると考えていることが明らかになった。

3つ目は、実習の早い段階から言葉で子どもと関わることに意識的になり、言葉選びや話し方の改善に努めようとしている点である。多くの学生は実習指導の先生たちの話し方について注意深く観察しており、なかでも、保育者が肯定的に子どもたちを受け止める姿や、子どもの理解しやすい言葉で繰り返し声をかける様子に注目している傾向があった。

以上のことから、①保育の現場における会話は子どもの言葉の真意を汲み取る〈場〉である、との認識は持ちつつも、②実際の実習においては子どもとの距離を縮めるために会話し、③保育者の言葉がけをなぞりつつ保育者としての話し方を身につけようとした、実習生としての学生像が明らかになった。また、子どもの発見や感動を発話からすくい上げ、保育を展開させる

という意識が全体的に乏しいものの、子どもの発言を拾い上げ次の活動へと導く保育者の姿に注目する学生がいることも明らかになった。このことから、保育者の言葉がけを観察する学生の姿勢に意識の差があることが分かった。

5. 今後の課題

今回のアンケート結果を踏まえた今後の課題は、保育者の言葉がけの観察ポイントについて確認し、言葉がけに対する意識の違いを縮小させる点にあると考えている。意識の違いを生み出す背景には、言葉で子どもに関わろうとする意識の差ばかりでなく、「言葉」そのものに対する認識の違いがある。保育者が子どもの発見や感動を理解する手段は、「言葉」である。だからこそ、子どもの発する「言葉」、すなわち発話に耳を傾ける必要があるが、子どもの言葉に注目する目的はそればかりではない。

保育における「発達」は、個々の子どもの「行動変化や経験の積み重ねの意味を、時間や環境のなかにおいて読み取り、育ちをとらえて行くことであると言われて¹⁾いる。これを子どもの言葉の「発達」に置き換えるならば、子どもが何かに感動し誰かに伝えたい瞬間や、他者の発した言葉に立ち止まり、その意味を考えようとする瞬間に立ち会い、子どもの〈心のうち〉を一緒になって言葉でとらえていくことである²⁾と考える。そうすることによって、手をつかむことも、実態を見つめることも不可能な〈心〉をとらえ、大切にする姿勢が養われるからである。

子どもの育ちを〈心〉、すなわち「内面世界」の成長としてとらえるアプローチの仕方については、現在、多くの研究者や保育実践者を通して、その方法が構築されようとしている³⁾⁴⁾。子どもの発話をとらえた保育活動としては、レτζョ・エミリア（イタリア）で実践されている「子どもたちの100の言葉」から保育を組み立てる活動が紹介されて以来、子どもの発見や感動の現れとして「言葉」をとらえようとするアプローチが日本でも試みられるようになった⁵⁾。子どもの〈心〉の育ちを「エピソード記述」という方法でとらえて行く試みも、その一つである⁶⁾⁷⁾。

「エピソード記述」は、保育者が一人の子どもの発話を主体的にとらえ、「言葉」を手がかりにして子どもの〈心のうち〉をとらえて行く方法である。ひとりの子どもの「言葉」にじっくりと関わることは、その子どもの成長だけを見つめているように考えがちである。しかしながら、一人の子どもの発話をすくい上げることは、その子どもが所属する集団全体の学びへとつながる入り口であり、ともに育つ姿を援助することにつながる。

保育者の言葉がけは、子どもの〈心のうち〉をとらえた保育を構築して行く上で、欠かせない行為である。言い回しや話し方などの表面的なテクニックを学ぶだけでは、保育者が言葉で子どもたちに関わり、作り上げて行こうとしている保育を理解することはできない。今後は、保育者となる学生たちに〈心のうち〉をとらえる活動として言葉がけを理解するようにながすとともに、そのために必要な実践的なアプローチ法として「エピソード記述」の紹介や考察を試みる必要があると考えている。

文献

¹⁾秋田喜代美（2013）「子どもの育ちと保育の質」『発達 Vol134』 p4-5

²⁾大宮勇雄（2010）『学びの物語の保育実践』ひとなる書房

³⁾白石淑江・水野恵子（2013）『スウェーデン 保育の今—テーマ活動とドキュメンテーション—』かもがわ出版

4) 鯨岡峻 (2013) 「発達研究の新しい枠組みのために」『発達 Vol134』 p2-3

5) 秋田喜代美 (2003) 「レジョ・エミリアの教育学」『子どもたちの想像力を育む』東京大学出版会 p73-92

6) 鯨岡峻/鯨岡和子 (2009) 『エピソード記述で保育を描く』ミネルヴァ書房

7) 鯨岡峻 (2013) 『子どもの心の育ちをエピソードで描く—自己肯定感を育てる保育のために—』ミネルヴァ書房

資料「【言葉】に関するアンケート」結果一覧

設問「実習中の子どもとの会話と日ごろの会話とでは、会話から得られるものは違いましたか。」

- ・日頃の会話と一緒にだった 6名
- ・無回答 6名

具体的な記入は以下の通り。

- ・普段よりも会話の中で相手のことを考えました。
- ・いつもよりもどういう気持ちでこの言葉を発したのかを意識していたので、そこが違った。
- ・子どもたちの話し方、表情、声色、言葉遣いから多くのことを読みとろうとし、受け止めようと思って会話をした。
- ・普段の会話では言葉の表面だけをなぞりしているが、実習中は子どもが発する言葉の意味を考えて会話をした。
- ・意思の疎通というよりも、子どもの気持ちをくみとるところ。
- ・相手の気持ちを常に汲み取ろうとしているかしないか。普段は何となく会話もある。
- ・年齢がはなれているので理解しよう。聞こうと意識しながら会話をした。
- ・子どもの言いたいことを聞きとることが大変だった。
- ・子どもは相手の目等を気にしないで自分の気持ちをストレートに伝えてくれる。
- ・日頃の会話とは違う予想外の反応や話しの変化が得られた。
- ・実習中は子どもの発達により寄り添っているからこそ見えるものがあった。
- ・話の内容だけでなく、話し方などから、子どもの心情も分かることがあったから。(大人だとそれも表わさない人もいるから)
- ・日頃の会話は、自分が話している方が多いが、実習中は、質問をするが回答についてはうなずいて聞いたり、肯定する言葉を発していた。
- ・具体的に、ひとつずつ丁寧に話さないと子どもには伝わらない。
- ・会話が成り立たないことがしばしばある。
- ・より相手に理解しやすいように話すようにした。
- ・子どもには、子どもが分かるように具体的に話すことが必要である。
- ・子どもと会話した時は、子どもが答えやすいような質問をするなど、より相手のことを考えた。
- ・大人同士の会話で通じるものも、子どもとでは伝わらない部分が多々あった。
- ・普段はただ話したいことや聞きたいことを話しているけれど、実習中では一人の人間の中身や園の中身について話をしていた。
- ・話す内容が違う。話し方が違う。
- ・肯定的に声掛けをした。
- ・子どもの会話と友達の会話は、自分にとって気をつけるべき言葉と安心できる言葉です。
- ・話している人間が同世代ではなく子どもであるため、その世代の流行や好きなものなどを知った。
- ・子どもとの会話では意外性や発見がたくさんあった。
- ・実習で出会う子どもは初対面だから、何を聞いても初めてのこと。

- ・初めて会う人にも自分から話しかけてくるというところ
- ・子どもは「聞いてっ！聞いてっ！」と自分のことを話してくれる。
- ・大人にはない感性を子どもから得られる。
- ・子ども視点と自分や自分のまわりの人の視点の違い。
- ・子どもの視点による違い。

設問「実習中の指導担当の先生の言葉遣いや言い方で印象に残ったことはありましたか。」

- ・なかった 3名
- ・無回答 1名

具体的な記入は以下の通り。

- ・同じ言葉を繰り返し使って、子どもが分かりやすく印象に残るように話していた点。
- ・年齢の差によって分かりやすい、伝わりやすい言葉を選んでいると思いました。
- ・子どもたちに問いかけるようなやりとりが多かった。
- ・他人との比較ができるようになってきた子どもに対して、自己肯定感を与える言葉がけ。
- ・がんばれと応援することは、子どものやる気を引き出すことにもつながるが、場合によっては、子どもにとってプレッシャーになっているかもしれない、ということ。
- ・「だめ」という言葉を聞かなかった。いけないことは教えるけど、一方的に「だめ」という言葉を使わない。
- ・先生1人1人の声掛けも様々で、ポジティブな明るい声掛けは私が聞いていてもたのしい好印象だった。
- ・パップパ（服に付いたものをはらうしぐさ）、あつまれ～（残ったごはんをかきあつめること）などの擬音（態）語を多く用いていた。
- ・子どもに使う言葉は、大人との話し方とは違い、分かりやすく、同じ言葉を繰り返していた。
- ・簡単な言葉で子どもが理解しやすい言葉、擬態語、擬音語が多い。
- ・伝えたいことを1つ1つに分けて話していた。
- ・「～しないで」ではなく、「～しようね」。「格好良い」を多く使っていた。
- ・子どもに足しての強い口調、傷つけるような不適切な言葉がけ。
- ・年齢が低い子にも、赤ちゃん言葉ではなく、標準語で会話をし、言葉がわからなくても積極的に話しかけていた。
- ・「～ちゃんかっこいいね」など、できている人をほめて、まわりのできていない子をやる気をおこさせていた点。
- ・“ちゃんと座りなさい”ではなくて“かっこよく座れてるのは誰だー？”と肯定的な表現。
- ・言葉遣いと関係はないかもしれませんが、子どもにたたかれて舌打ちをした先生がいてとても驚きました。
- ・子どもの気持ちをひきつけるような言葉遣い、言い方だった。
- ・子どもたちが分かりやすいように、また丁寧な言葉遣いをしていた。
- ・子どもたちがわかりやすいようにていねいな言葉使いだった。
- ・子どもにとって伝わりやすい言い回しをしていた。
- ・背筋を伸ばして、きれいに座りましょうなどというのではなく、背中シャキーンの子は誰かな～？という言い方。
- ・子どもたちへの質問のときなど子ども自身が考えられるような聞き方をしていた点。
- ・先生が子どもに示すのではなく、子どもからの発言から会話や活動を広げていた。

- ・いけないことをした時、どうしていけないのか理由を言っていた。
- ・大人の視点で子どもに声かけをするのではなく子どもがどうすればそうしたいと思えるか考え、声かけて工夫していた点。
- ・直接的に指示するのではなく、子ども自身が自ら気づき行動できるような言い方をしていた点。
- ・丁寧な言葉遣いで、子どもたちに優しく問いかけるような言い方。
- ・子どもたちに分かりやすいコトバ、具体的な説明。
- ・子どもたちの会話にこう伝えれば良いよなどアドバイスをする姿に印象でした。
- ・「座りましょう」「○○しましょう」などという言い方ではなく、子どもが自ら考えられるよう促す話し方をしていた。「時計の針が6ってことは何だった？」など。
- ・何かトラブルがあったときに、一人の子どもにどうしたらよかったかを問いかけるのではなく、みんなでどうしたらよいか考えることで全員にどうしていけないか考える能力を身につけさせていた。
- ・ゆっくり話したりトーンを変えることで子どもを注目させる。
- ・ほめる時、怒る時等、時によって声色がわかりやすく違っていた。
- ・自分の指導担当だった先生は子どもたちに対して優しい声かけが多い印象が強い。
- ・子どもが興味をもてるように、言い方に勢いや静かさなどがあった。
- ・子どもたちにすごく分かりやすい言葉だったり、ゆっくり話していた点。
- ・棒読みではなく、言葉1つに気持ちをこめている気がする。
- ・言葉づかいというよりも、私たちと話すときより、子どもと話すときは声のトーンが上がっていたこと。
- ・リズムがよかった。